喉頭全摘出術を受けた患者の退院後の日常生活について

－奈良交声会会員 83 名に対しアンケート調査を実施した結果より－

A 棟 7 階南
○高　野　裕　子　　中　嶋　照　代
桝　谷　陽　子　　但　田　奈緒子

Ⅰ．はじめに

喉頭全摘出術（以下喉摘と略す）を受けた患者は、永久気管孔造設によるボディイメージの変化や失声を余儀なくされ、様々な問題を抱えながら社会復帰している。現在、奈良県立医科大学附属病院耳鼻咽喉科病棟（以下当病棟と略す）では過去 5 年間 4 1 例の喉摘術が行われていた。術後はパンフレットを用いた患者指導を行っているが、退院後の状況を把握していない指導となっているのではないかという疑問を持った。

そこで今回、退院してからの身体面・社会面・心理面に関する状況を明らかにする目的で調査・検討した。

Ⅱ．対象及び方法

平成 13 年度現在、奈良県における喉頭摘出患者団体（奈良交声会）に協力を依頼し、会員 165 名中当病棟で喉摘を受けた 83 名を対象とし、平成 13 年 8 月 18 日～同年 8 月 31 日まで郵送で無記名の質問紙を用いた調査を行った（**表 1**）。回収率は 83 名中男性 54 名、女性 6 名計 60 名で 72％であった。

Ⅲ．結果

今回の調査において、手術を受けた年齢は平均 62 歳であった。手術後経過年数は平均 8.5 年であった（**図 1**）。家族構成は独居 6 名、同居 51 名であった。

退院後の日常生活では、入浴時困った事があるが 20 名（33％）、ないが 36 名（60％）であった（**図 2**）。具体的内容として「肩まで湯船に浸かれない」「. 頭を洗うのが困難」「気管孔に水が入る」等であった。気管孔が小さくなった事があるが 10 名（16％）、ないが 46 名（77％）であった。気管孔からの出血はあるが 28 名（47％）、ないが 30 名（50％）であった。出血時の対処方法は「診察し薬をもらう」「吸入を多くする」「加湿をかける」「 交声会の人に話を聞いた 」「そのまま何もしない」等であった。排便の調子は良好が 41 名 (69％)、不良が 14 名 (23％) であった。不良の理由は「排出時に息が漏れるのできばりにくい」「 ガスが良く溜まる 」等であった(**図 3**)。喉摘に関係なく、最も不自由と思っている事があるが 29 名 (48％)、ないが 24 名 (40％) であった（**図 4**）。不自由な内容として「 手足が不自由である 」「目が見

えにくくなった、耳が悪くなった」等であった。

交声会の出席状況については、出席するが 37 名 (62％)、しないが 17 名 (28％) であった。出席しない理由に「付き添いが必要で行けない」「忙しい」「遠方である」等であった。日常使用している会話方法は電気人工喉頭 25 名 (42％)、食道発声 11 名 (18％)、筆談 10 名 (17％)、パイプ式人工笛 7 名 (12％)、ジェスチャー 7 名 (12％) であった（**図 5**）。年令別に発声方法をみると高齢者に電気人工喉頭を使用する人が高率であった（**図 6**）。失声前と失声後の意志伝達についての変化では、家族との関わりに不満のある人は 16 名、地域との関わりに不満のある人は 12 名であった。また、家族との関わりに不満のある人は、地域との関わりにも不満を持っている人が多く、検定の結果有意差を認めた（**図 7**）。初めて外出した日は退院後 8 ～ 30 日目が 20 名 (40％) で高率であった。外出時付き添いのいる人は 24 名 (48％)、いない人は 22 名 (44％) であった。

失声を受容した時期は手術後 1 年以内が 44 名 (73％) と最も多かった（**図 8**）。発声方法を学んだ人は 43 名 (71％) で、発声練習をしている時の気持ちについてイライラするが 26 名 (60％) であった。発声方法を習得しての気持ちの変化はあるが 33 名 (77％) で、うち明るくなったのは 28 名（85％）であった。気管孔がある事での他人と会うことに抵抗がある人は 22 名 (37％)、ない人は 30 名 (50％) であった（**図 9**）。抵抗がある理由に「他人の目線が喉に向きその都度説明しないといけない」「いつも見られている気がする」等であった。気管孔に抵抗のある人と地域との関わりをみると 22 名中 6 名のみ不満と答えていた（**図 10**）。

Ⅳ．考察

身体面に関して、気管孔に穴があくという障害があるにも関わらず自己にて入浴できている人が大部分であり、力みにくい状態であっても排便コントロールにも問題なく自立して生活できているという結果が出ている。しかし、術後経過年数の平均が 8.5 年となっているため、今現在手術に関係ない事で不自由と思っている人は、日常生活に慣れが生じて身体状況の変化に対応ができており、他の身体機能の低下に障害を感じていると考える。今後は、加齢とともに活動能力の低下を伴い徐々に自立して生活できなくなってくる恐れがあり気管孔の管理も難しくなって、入浴・排便といった日常生活行動にも影響してくると考えられる。

社会面に関して、日常使用している会話方法で人工喉頭が多いのは、吉村らは「人工喉頭では 6 ヶ月未満で 95.6％が代用発声法を習得する」[1] と報告しているように、食道発声は高齢者には難しくそれに比べて器具を使用すると年齢・手術方法に関係無く比較的早期に習得できるからと考える。また、家族との関わりに不満を持つ人は地域との関わりにも不満を持っていることが多いということは、家族の重要性を表している。このことから家族を含めた関わりを持って不安を表出する機会を作る必要があると考える。しかし、今回調査の対象を交声会という代用発声法を習得している人にしぼったこともあるが、結果から失声により社会活動にあまり支障をきたしていないといえるので、社会との関わりは継続しているとわかった。

心理面に関して、坂谷内らは「失声を受容するまでには５年を要する」[2)]と報告している。しかし、今回の調査においては失声を受容した時期がほとんどの人が５年以内であった。このことは失声を克服するために早期より発声方法を学んでいたためと考える。代用発声によりコミュニケーションの障害によるストレスが軽減でき精神的安定をもたらしたと考えられる。気管孔があるというボディイメージの変化に対しては、羞恥心・他者に見られてるという劣等感として現れている。しかし、地域との関わりにおいて大半の人が支障をきたしていないと答えていることは、日常生活において身体面で自己管理できており患者自らストレスに対処しているからではないかと考える。喉頭癌手術後の５年生存率は80％と比較的予後が良いため、失声や気管孔があるというボディイメージの変化に対して少しでも早く克服できることが望ましいと考える。

Ⅴ．結論

退院してからの身体面においては「入浴・気管孔・排便の日常生活においてほぼ自立しており自己管理が行えている」社会面においては「代用発声法を習得することで社会活動に支障をきたさない」心理面においては「失声・ボディイメージの変化の受容は早い」とわかった。

Ⅳ．おわりに

喉摘患者は身体面・社会面・心理面に様々な問題を抱えながら生活している。今回退院後の生活状況について調査・検討し、患者指導の示唆を得た。今後はこれらの結果を踏まえ、生活状況がより高められるように援助していきたい。

引用・参考文献

1）吉村雅世他：音声喪失に伴う代用発声習得の期間・年齢から見た看護の一考察－近畿地区看護研究学会集録集，ｐ.107～110，1998.

2）坂谷内敏江他：咽頭摘出術を受けた患者の心理過程に関する研究（Ⅷ）―術後年数と発声の満足感の関連―，日本看護研究学会雑誌，１６（Suppl），ｐ.136，1993.

3）佐藤武男：食道発声法―喉摘者のリハビリテーション―，金原出版，３～14，東京，1993.

4）海野徳二：系統看護学講座　専門１７　成人看護学１３，医学書院，125～127，東京，1968.

表１.＜日常生活調査票＞　（一部抜粋）

当てはまる番号を選び、○をつけて（　　）内をうめてください。

＜性別＞　１）男　２）女　＜年令＞　満（　　）歳

＜職業＞　１）会社員・公務員２）専業主婦３）自営業４）アルバイト５）無職

＜家族構成＞　１）独居　２）同居

＊２）と答えた方にお聞きします。その内訳をお答えください。

１）親　２）配偶者　３）子ども　４）孫　５）兄弟姉妹　６）親戚　７）その他

☆身体的な事についてお聞きします。

・手術後何年目ですか？　（　　）年目

・入浴の時、困ったことはありますか？　１）はい　２）いいえ

＊１）と答えた方にお聞きします。それはどのような事ですか？

・気管孔が小さくなったことがありますか？　１）はい　２）いいえ

＊１）と答えた方にお聞きします。

その時不安はありましたか？　１）はい　２）いいえ

・気管孔から出血されたことがありますか？　１）はい　２）いいえ

＊１）と答えた方にお聞きします。その時どのような対応をされましたか？

☆社会的なことについてお聞きします。

・交声会に出席されてますか？　１）いつも出席する２）しばしば出席する

３）ときどき出席する　４）ほとんど出席しない　５）全く出席しない

＊４）と５）を答えた方にお聞きします。それはどのような理由ですか？

・どのような伝達方法を使用していますか？（複数回答可）　１）タピア

２）電気喉頭　３）食道発声　４）筆談　５）ジェスチャー

・声を失う前と失ってからの意志伝達についてお聞きします。

家族とのかかわりについて　１）非常に満足　２）少し満足

３）あまりかわらない　４）少し不満　５）非常に不満

地域とのかかわりについて　１）非常に満足　２）少し満足

３）あまりかわらない　４）少し不満　５）非常に不満

☆心理面についてお聞きします。

・声を失ったことを受け入れた時期はいつですか。　１）手術後１年以内

１）手術後３年以内　３）手術後５年以内　４）手術後５年以降

・発声方法を習得して気持ちの変化はありましたか？　１）はい　２）いいえ

＊１）と答えたかたにお聞きします。どのような気持ちの変化ですか？

１）非常に明るくなった　２）少し明るくなった

３）あまりかわらない　４）少し暗くなった　５）非常に暗くなった

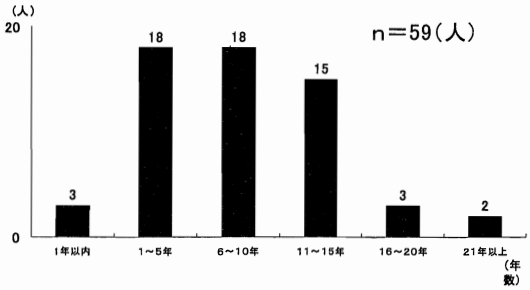

図1. 手術後年数

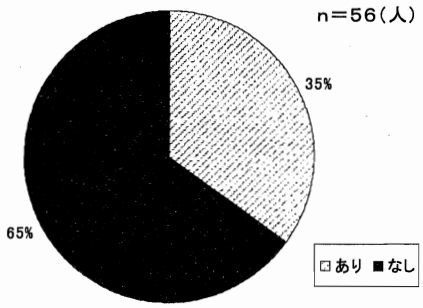

図2. 入浴時困ったこと

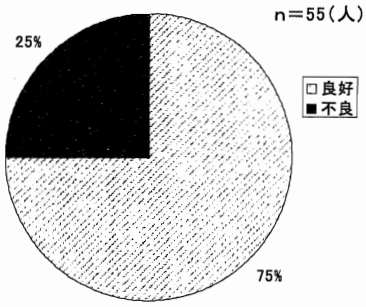

図3. 排便の調子

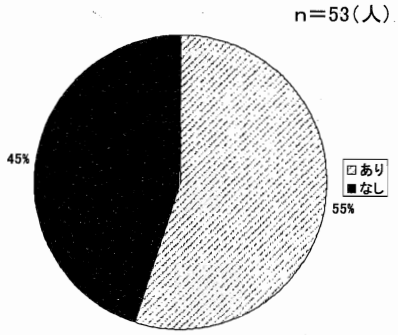

図4. 身体の不自由さの有無

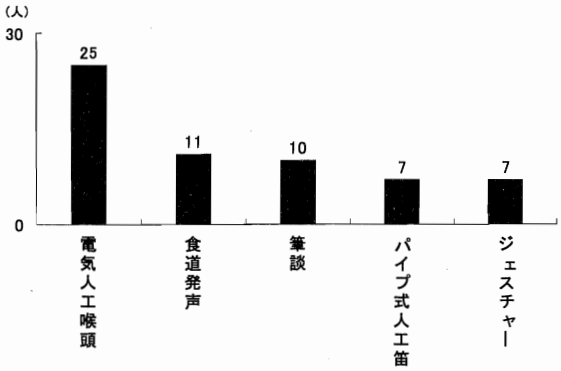

図5. 会話方法(複数回答)

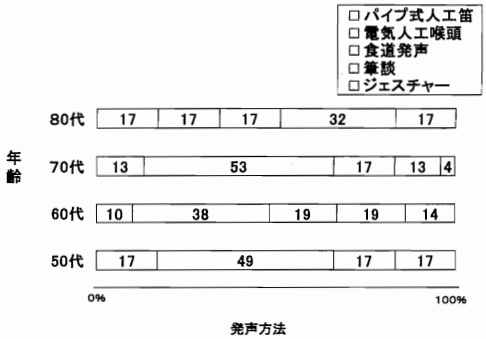

図6. 年齢と発声方法

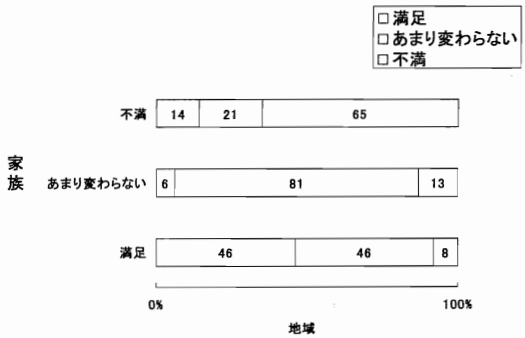

図7. 家族と地域の関わりの相違

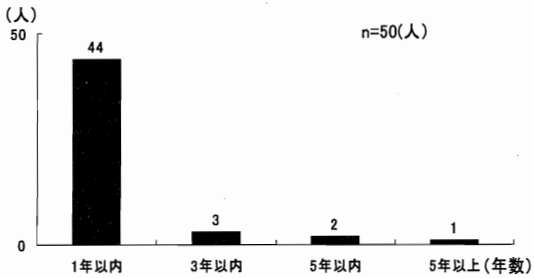

図8. 失声の受容までの時期

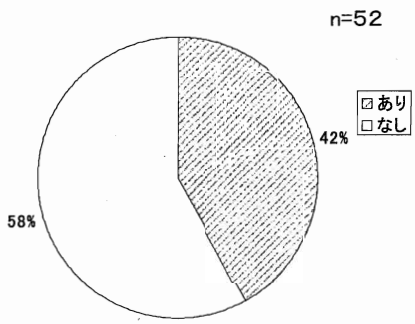

図9. 気管孔があることによる抵抗感

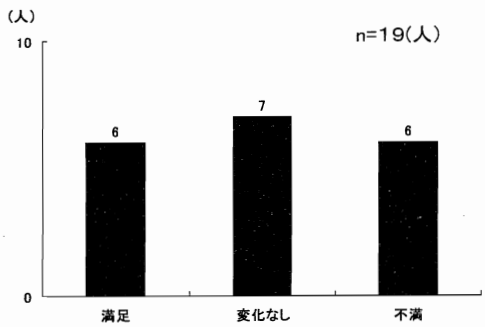

図10. 気管孔に抵抗のある人と地域との関わり